

機関番号：34428

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520100

研究課題名（和文）寛政度内裏造営における禁裏絵所預土佐家と復古様式資料に関する研究  
 研究課題名（英文）Study of Tosa Family of the court painter and the materials of the traditional style of the imperial palace in the Kansei era

研究代表者

岩間 香 (KAORI IWAMA)

摂南大学 外国語学部 外国語学科 教授

研究者番号：50258084

研究成果の概要（和文）：寛政度内裏の造営資料である「御指図御用記」などから、次のことが明らかになった。(1) 清涼殿や紫宸殿などの儀式用建築では復古様式が採用されたが、それ以外の生活空間では実情に合わせた改変も見られた。(2) 障壁画の制作には大坂画壇の絵師も多数参加した。狩野派であるにもかかわらず土佐家の弟子として参加したケースがあった。(3) 内裏の儀式空間の例として、天皇の親が没した際に物忌みに用いられる倚廬の造営過程と、そこでの儀式を紹介した。

研究成果の概要（英文）：The followings were clarified from "Osashizugoyouki", a material of the Imperial Palace construction in the Kansei Era: (1). While traditional style was adopted in construction for the ceremony such as Shishinden, the style was modified as needed in the living space such as Tainoya. (2). A lot of painters also participated from Osaka in the production of paintings on partitions. In some cases, painters of Kano school participated as disciples at Tosa school. (3). As an example of the ceremony space in the Imperial Palace, it introduced the construction process of Iro, which was used for mourning when Emperor's parents died, and the ceremony there.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
平成 21 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 22 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：土佐家・絵所預・内裏・寛政・復古・障壁画

## 1. 研究開始当初の背景

寛政度内裏は、裏松固禪の『大内裏図考証』に基づき、平安時代の復古様式で造営されたとされている。

寛政度内裏に関する先行研究としては、藤岡通夫『京都御所』、平井聖『中井家文書

の研究 7』があり建築指図による平面分析が、また復古様式の復元過程については、島田武彦が『復古清涼殿の研究』で検討している。さらに千野香織は『日本美術全集 16』で障壁画の画題を分析している。また裏松固禪については西和夫、小沢朝江、吉

田早苗らの研究がある。

しかしこれまでの研究では、膨大な文献や資料について、読解や分析が十分に行われてこなかった。申請者は平成6年度から度々科学研究費補助金により、「土佐派絵画資料」「木子文庫」「中井家資料」などの整理調査を行い、寛政度の内裏関係資料を収集してきた。平成16年には住宅総合研究財団助成金により裏松固禪「院宮及私第図」を調査し公刊した。本研究はこれらの資料を活用し、研究を発展させたものである。

## 2. 研究の目的

(1) 寛政度内裏造営における復古様式資料の収集と分析、(2) 絵所預土佐家の役割を明らかにすることの2点である。具体的には以下のことを明らかにする。

① 寛政度内裏の造営記録に基づき、復古様式による建築や装飾の復元の過程を明らかにする。

② 造営に際して参照した古文献、絵画、建築、実物資料を実地に調査し、復古様式との関連を考察する。

③ 絵所預土佐家が果たした役割を、a 復古資料収集、b 壁画制作、c 絵師の統率などの観点から明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 寛政度内裏造営の同時代記録である「御指図御用記」「裏松家文書」などの解読により、復元の過程を明らかにする。

(2) 土佐光芳・光貞などの作品を調査し、資料を収集する。また土佐派に関係した内裏障壁画絵師の作品の資料を収集し、調査する。

(3) 裏松固禪の参照した絵巻物を、「大内裏図考証」「院宮及私第図」などから明らかにし調査する。

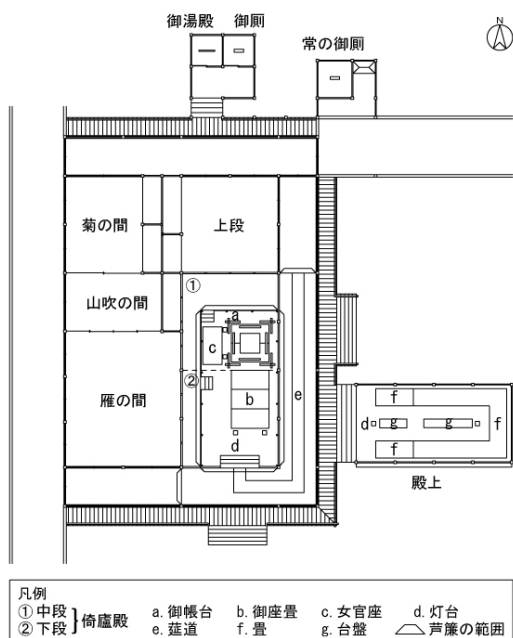
## 4. 研究成果

### (1) 復古様式資料の収集と分析について

寛政度内裏の造営記録である「御指図御用記」(宮内庁書陵部)の読解を進め、そこから新たな問題や資料を発掘した。紫宸殿や清涼殿などの復古様式建築の造営過程については、天明8年12月までは幕府方である京都大工頭中井家の棟梁が図面を作成している。しかし翌寛政元年からは禁裏大工である木子播磨が登用された。この木子播磨はかつて事件にかかわり罷免されていたが、内裏造営により復職を果たしたものである。この木子家について「木子文庫」(東京都立中央図書館)の文書を解読し分析したところ、内裏造営に関わった家は木子家は3家あることが判明した。その中でも木子播磨は幕府大工に不満をもつ禁裏公家たちが採用を熱望したものであった。木子播磨は公家たちの立場にたち、幕府の大工である中井家の作成した図面のチェックや、図面の書き直し、公家への技術に関する助言を行った。以上のことについては別掲の論文を発表した。

紫宸殿・清涼殿などの儀式用建築には新規に復古様式が採用されたが、生活空間についてはどういった変化があったのかを検討した。天皇の御座所である常御殿についてはすでに2007年に論考を発表しているので、2008年度からは女官の住居である対屋と女婦部屋について検討した。その結果、これらの生活空間では女官ら、使用者の希望が採用され、日照を考慮して廊下の位置を変えたり、便所の位置が考慮されたりしたことが判明した。また寛政度内裏では原則として宝永度内裏の建坪よりも増えないことが幕府から求められたが、宝永度以降に増築された部分については、寛政度内裏においても建築が認められた。この増築のほとんどは収納空間であった。

また完成した内裏の使用例として、特殊な儀式空間である倚廬について、実態と変遷を明らかにした。倚廬は天皇の親が没した時に設置される服喪のための空間で、御所の部屋の床を切り下げ、竹や葦簣で仮小屋を作るものである。江戸時代には13回作られており、「中井家文書」「木子文庫」から寛政度内裏を含めた倚廬の図面を数点見出した。その結果、倚廬の形式は近世を通じてほぼ変更のないこと、また設置する場所は、近世初期には小御所と学問所であったが、後期には御学問所に固定されたことが判明した。さらに近世後期には倚廬では儀式が行われるのみで、実



寛政度内裏の倚廬

際には物忌みの14日間、天皇は常御殿で生活したことも明らかになった。これらについては学会で発表し、論文を執筆した。

## (2) 絵所預土佐家の役割について

土佐光貞は内裏障壁画にたずさわる絵師をまとめ統率した。採用にあたってはそれぞれ試験を課していることが「御指図御用記」から判明する。採用された絵師の中には大坂画壇の絵師も多く含まれていた。その中には

桃田三笑などのように、狩野派の画風であるにもかかわらず、「土佐弟子」として登録・採用されている者も数名見られた。これは土佐光貞が便宜をはかったものと思われる。80年振りに行われた内裏造営に参加することで、絵師は自らの評価を高めたと考えられ、土佐光貞の裁量がその後の大坂画壇の発展に大きく寄与したことが推察できる。

土佐光貞は一方で千家などの茶匠や文化人と交遊関係のあったことを、肖像画や作品例から明らかにした。内裏の外においても土佐光貞は京都画壇の中で大きな存在であったことが判明する。これは『今日庵歴代 第9巻 不見齋石翁』に土佐光貞と不見齋として発表した。

一方土佐に対する評価を伺わせる資料も見出された。「大内裏図考証」を著し、復古内裏造営の助言をした裏松固禪は「院宮及私第図」に土佐筆「泣不動縁起絵巻」を掲載する。絵巻は藤貞幹「好古小録」の記事などから、奈良国立博物館本と推定でき、調査・撮影を行った。巻末の極めや絵の細部を観察した結果、土佐派周辺の作風を写した模本であることを確認した。固禪はこの絵巻に書かれた「光茂筆」とする極め書を信用し、「院宮及私第図」において高く評価している。逆に近世に禁裏絵師になった土佐家の資料については、中世以前のものではなく採用できない、としているなど興味深い事実が判明した。これらについては論考を準備中である。

以上のように復古様式内裏の生活空間の造営過程と、完成した内裏に設置された儀式空間を明らかにした。また復古様式の資料である絵巻物についても一部で調査し知見を得ることができた。さらに土佐光貞による絵師の統率では、自家以外の流派の絵師にも自家の弟子として参加させた実態が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計6件)

①「近世における倚廬について」栗本康代、植松清志、岩間香 (他2名、3番目)、査読有、総頁8頁、『生活科学研究誌』8号、2011.3 (掲載決定)

②「近世における倚廬の空間と儀式」、栗本康代・植松清志・岩間香 (他1名、3番目) 『日本建築学会学術講演梗概集』F-2分冊、査読無、pp.105-106、2010.9

③「禁裏修理職大工の木子家—寛政度内裏に関する研究 (3)」栗本康代、植松清志、岩間香 (他1名、3番目) 『日本建築学会計画系論文集』652号、査読有、pp.1591-1597、2010.6

④「近世における倚廬の形式と変遷」、栗本康代、岩間香、植松清志 (他1名、2番目) 『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2分冊、査読無、pp.463-464、2009.8

[http://ci.nii.ac.jp/els/110007981923.pdf?id=ART0009571782&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1304246718&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110007981923.pdf?id=ART0009571782&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1304246718&cp=)

⑤「寛政度内裏における女官の生活空間について—対屋・御末女孀部屋を中心に—」栗本康代、岩間香、植松清志 (他1名、2番目) 『日本建築学会学術講演梗概集』F-2分冊、査読無、pp.61-62、2008.9

[http://ci.nii.ac.jp/els/110007073654.pdf?id=ART0009008586&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1304246531&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110007073654.pdf?id=ART0009008586&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1304246531&cp=)

⑥「寛政度内裏における女官の生活空間について—対屋・御末女孀部屋を中心に—」栗本康代、岩間香、植松清志 (他1名、2番目) 『日本建築学会近畿支部研究報告集』48号、査読無、pp.833-836、2008.6

[http://ci.nii.ac.jp/els/110007052954.pdf?id=ART0008982452&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1304246914&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110007052954.pdf?id=ART0008982452&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1304246914&cp=)

[学会発表] (計5件)

①「近世における倚廬の空間と儀式」、栗本康代・植松清志・岩間香 (他1名、3番目) 日本建築学会大会 (北陸)、2010.9.10、富山大学

②「池田をめぐる画家 —桃田伊信・三笑と寛政度内裏—」岩間香、池田郷土史学会、2009.9、池田市民文化会館

③「近世における倚廬の形式と変遷」、栗本康代、岩間香、植松清志 (他1名、2番目) 日本建築学会大会 (東北)、2009.8.26、東北学院大学

④「寛政度内裏における女官の生活空間について—対屋・御末女孀部屋を中心に—」栗本康代、岩間香、植松清志 (他1名、2番目) 日本建築学会大会 (中国)、2008.9、広島大学

⑤「寛政度内裏における女官の生活空間について—対屋・御末女孀部屋を中心に—」栗本康代、岩間香、植松清志 (他1名、2番目) 『日本建築学会近畿支部研究発表会』2008.6.21、大阪工業技術専門学校

[図書] (計1件)

①岩間香他、淡交社『裏千家今日庵歴代 第9巻 不見齋石翁』(千宗室監修)、2008.10、120

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩間 香 (IWAMA KAORI)

摂南大学 外国語学部 外国語学科 教授  
研究者番号：50258084